

3 丹波黒大豆生産地における高品質安定生産へむけた課題

はじめに

篠山市での丹波黒大豆（以下、黒大豆）は、2005年では子実（502.6ha）やエダマメ（114.1ha）として栽培されており、作付面積は616.7haにもものぼる重要な地域特産物として育まれてきた。特に、子実は県下の42.6%を占め、最大の産地であり、極大粒で良食味のため全国的に名を馳せている。

従来、黒大豆の栽培は、水稲3年、黒大豆1年の輪作で行われ、ブロックローテーションにより栽培ほ場も集約されていた。しかし、近年、水稲の生産調整が強化され、黒大豆の作付け間隔が短くなっている。

このため、土壌伝染性立枯性病害の発生が増加するとともに、大粒率も年々低下している。

篠山市での栽培管理の状況

黒大豆を生産している農家戸数は3,000戸を超えるが、その87%は作付面積が30a未満である。また、生産の担い手は、主に第二種兼業農家であり、高齢者や女性が日々の栽培管理作業を行なっている。

主要な栽培管理作業の流れは、図1のとおりである。栽培管理作業が機械化され、総労働時間は短縮されてきたが、生産者からは「苦労豆」と呼ばれているように、高品質安定生産に加え、更なる省力化を図る必要もある。

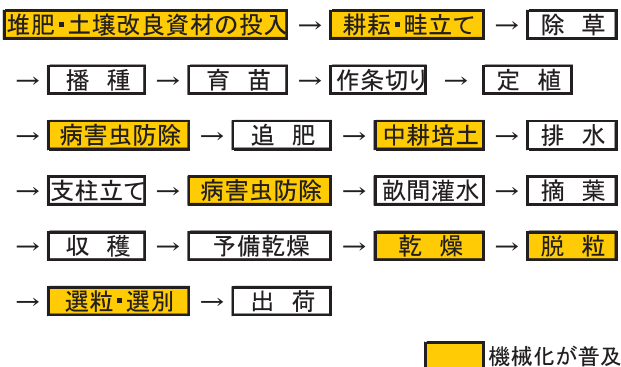


図1 主な栽培管理作業の流れ

大粒率の推移と土壌伝染性立枯性病害の発生状況

大粒率は、図2のとおり年々低下している。天候による要因が大きいですが、黒大豆の作付けが増加する中、地力の消耗が急激に進み、地力低下がその要因ではないかと推測されている。

土壌伝染性立枯性病害として黒根腐病、茎疫病、白絹病の3つが主要重要病害であり、篠山市でも立枯性病害が激増している（図3）。発病株は地上部全体が萎凋、枯死し、減収に結びつくだけでなく、子実肥大・充実期に被害が顕著となり、生産者の営農意欲をそぐため、生産振興上大きな阻害要因である。

おわりに

黒大豆は、観光・加工・流通といった各産業を支える中核的な農産物として位置づけられているため、黒大豆産地の動向は、農業振興の枠組みだけでなく様々な業種や産業にまで影響を及ぼしてしまう。

このため、産地と普及センター組織と試験研究機関との密接な連携により、早期に課題解決を図り、産地の維持・発展を支援する必要がある。

樋本 英司（篠山農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：079-552-7469）

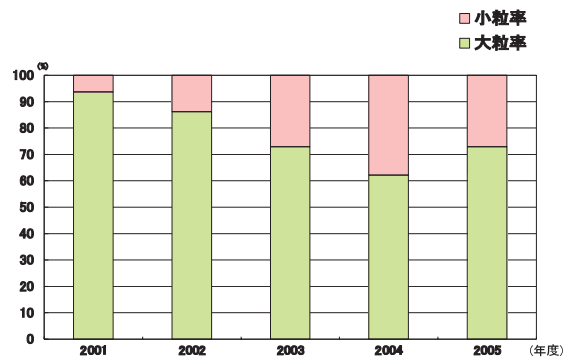


図2 粒径比率の年次別推移

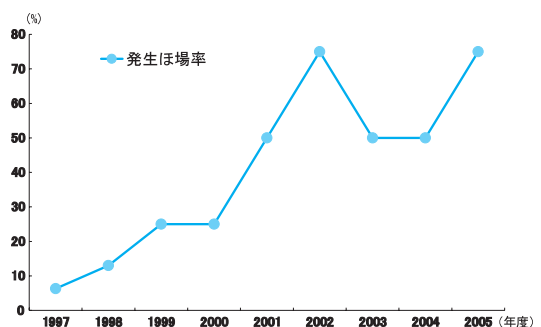


図3 立枯れ性病害発生ほ場率の年次別推移